

# 『秘密の花園』にみる子どものナーシング・ナラティブ *Children's Nursing Narrative in The Secret Garden*

西垣 佐理

## Abstract

*The Secret Garden* (1911), a masterpiece in children's literature crafted by Frances Hodgson Burnett (1849-1924), is a story of healing and resurrection. It starts with images of illness and depression engulfing the world. The protagonists, Mary Lennox and her cousin Colin Craven, are abandoned by adults, and they both become spoiled and selfish. Their physical and mental healing process is the turning point of the story, and it is shown through the regeneration of an abandoned garden in Misselthwaite Manor in Yorkshire. This process is a recurrent theme in the nursing narratives during the Victorian era; Charles Dickens's novels are striking examples of this narrative style.

In this paper, I will elaborate on the characteristics of a nursing narrative by children by comparing them with typical narrative patterns in Victorian literature and focusing on the depictions of healing in the story.

## はじめに

イギリス生まれのアメリカ児童文学作家、フランシス・ホジソン・バーネット (Frances Hodgson Burnett, 1849-1924) の代表作の一つ『秘密の花園』 (*The Secret Garden*, 1911) は、ヨークシャーのミセルスウェイト邸のおじの元に引き取られた、インド生まれの孤児であるメアリー・レノックスと、そのいとこで病弱な少年コリン・クレイヴンが、屋敷の庭園内にある、打ち捨てられていた秘密の花園の復活を通して、心身共に回復していく物語である。この物語には、児童文学に特有の病弱な登場人物と、それに伴う看護行為が散見される。だが、もっとも興味深いのは、癒しの対象となる人物が物語の前半と後半で大きく入れ替わるだけではなく、大人がもたらす典型的な看護の方法を否定していることにある。物語の前半ではヒロインのメアリーが癒され、後半ではコリンが癒されて父子関係の修復がみられるが、これらはすべて大人の看護によるものではないことに注目する必要がある。

児童文学が一つの文学ジャンルとして確立したのは、ヴィクトリア朝期に遡る。そのた

め、勃興期の児童文学の多くは、ヴィクトリア朝的価値観を踏まえて書かれていることが多い。特にヴィクトリア朝時代の小説にみられる「看護・癒しの物語」(ナーシング・ナラティブ)のパターンは児童文学にも随所にみられ、主として登場人物の関係性の変化や物語転換の契機として機能する場合が多い。

ところが、児童文学においては、主役が子どもであるために、癒しの行為の意味するところが大人のそれとは大きく異なる。大人の看護行為には、当時の理想的女性像の反映や、ジェンダー・階級・公衆衛生・プロフェッショナリズムといった概念が入り込み、それらが登場人物の関係性と相まって、物語の重要な局面を構成している。また、大人の物語では、恋愛関係が看護を契機として大きく進展するといった展開も多い。しかしながら、子どもの場合はそうしたジェンダーやアイデンティティは未定、あるいは未分化であって、大人の物語にみられる社会性や経済、恋愛といった要素は大きな役割を果たさない。

このように、癒しの行為が大人のそれとは大きく異なる物語が児童文学という枠組みの中で書かれているという点は非常に興味深い。また、児童文学における子どもの死や障害、癒しといったテーマは、たとえばロイス・キースの論考で、スイスの作家ヨハンナ・シュピリ (Johanna Spyri, 1827-1901) の児童文学作品『ハイジ』(Heidi, 1880-81) に登場する、病弱で足の不自由な少女クララと、同じく車椅子生活を強いられている『秘密の花園』のコリンとの比較分析がなされている。だが、こうしたテーマを英国ヴィクトリア朝小説の看護や医療の言説と比較分析した論考はあまり存在していないように思われる。

そこで本論では、『秘密の花園』にみられる子どもの癒しの表象に着目し、大人のナーシング・ナラティブとは異なる特徴を、作品の分析を通して明らかにしていきたい。

## 1. ヴィクトリア朝イギリス文学におけるナーシング・ナラティブ

バーネットの自伝『私の一番よく知っている子ども』(The One I Knew The Best Of All, 1892)によると、彼女は幼い頃「本に飢えた子」で、ロマンスから新聞に掲載された逸話に至るまであらゆる種類の物語を求めていたとある(52)。また、伝記作家のアン・スウェイトは、バーネットを「他の作品より引きつけたのはディケンズやサッカレーの作品であり、彼女自身の作品にもっとも頻繁に引用したのも彼らの作品だった」と指摘する(16)。後年彼女がアメリカに移住して、近所のバーネット家と交流を深めていった際、後に結婚することになったスワン・バーネットにディケンズやテニスン、サッカレーといったヴィクトリア朝時代の作家を紹介し、彼らの作品を読んで感想を語り合っていたらしい。こうした読書経験から、当時の文学作品に描かれた癒しの物語が、バーネットの作品に少なからず影響を与えていることはまず間違いないと思われる。そこで、『秘密の花園』の看護場面を分析する前に、前提となっている英国ヴィクトリア朝時代における看護の言

説を俯瞰しておきたい。

病や医療、社会の公衆衛生に関する議論は、19世紀に入ってから急速に発展し、特にヴィクトリア朝期のイギリスで大きく注目された。たとえば、1830-40年代に猛威を振るったコレラや飢饉、1842年に出されたエドウィン・チャドウィック (Edwin Chadwick, 1800-90) の公衆衛生に関する報告書が出されたことで、世論に大きな影響を与えた。また、1853年に勃発したクリミア戦争で、フローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) の活躍が見られ、1860年の看護学校設立へとつながるなど、職業看護師にまつわる事情も大きく変わっていった。

こうした一連の事象は、文学作品にも大きな影響を与えた。特に当時の社会事情に対して、小説作品内でもって改革を訴えていたチャールズ・ディケンズは、『マーティン・チャズルウィット』 (*Martin Chuzzlewit*, 1843-44) や『荒涼館』 (*Bleak House*, 1850-51) などで、当時の職業看護師の劣悪な実態や、伝染病が階級を超える様子を描いている。その際、患者として登場するのは主に大人の登場人物であり、彼らが病にかかって看病を受ける場面が、物語内で重要な転換点として位置づけられている。また、子どもが患者となる事例も、『ドンビー父子商会』 (*Dombey and Son*, 1846-48) で描かれている。そこでは、病弱の幼いポール・ドンビーが姉のフローレンスに看病されるが、彼は看病の甲斐なく亡くなってしまふのだ。しかし、この場面もまた物語上の大きな転換点として機能しているのである。

ディケンズに限らず、職業看護師や看護行為を扱った作品は、シャーロット・ブロンテやエミリー・ブロンテ姉妹、エリザベス・ギヤスケル等、数多く存在し、ヴィクトリア朝イギリス文学を語る際に非常に重要な要素の一つになっている。これらの作品におけるナーシング・ナラティブで重要なのは、あくまでも看護行為の主体が「大人」であるということにつきる。当然、医者も関与する場面が登場するが、それよりも、女性登場人物たちが、看護行為を通じて家庭内における理想的な女性像を体現していることに重きが置かれている点には注意しなければならない。女性の看護行為は、当時のジェンダーイデオロギーや階級といった問題を浮き彫りにするだけではなく、当時の父権社会を「健全な」秩序に戻すための役割を果たしている。ただし、専門職としての看護師というテーマには、ナイティンゲールが提唱した、中流階級の女性の自立という問題提起も含まれているため、先に挙げたジェンダーイデオロギーの枠内に留まらない要素を含むという点も指摘しなくてはならない。

## 2. 『秘密の花園』における病と癒し

バーネットらが活躍した19世紀後半から20世紀前半にかけての児童文学においても、

基本は大人の世界と大きく変わらない保守的な価値観の元に書かれていることが多い。だが、それだけではなく、児童文学作品では、大人の世界に反発して子ども自身の世界を作り上げることに大きな意味がある。ここで重要なのは、そうしたヴィクトリア朝イギリス文学におけるナーシング・ナラティブと、バーネットが描く子どもの癒しとの間にどのような類似点や相違点があるかということである。その点を踏まえ、『秘密の花園』における癒しの表象をテキストに沿って具体的にみていきたい。

作品冒頭から、物語世界全体は病に冒されている。メアリーが暮らしていたインドの屋敷は伝染性のコレラに見舞われ、彼女を除いて皆、病に冒されて亡くなってしまった。生き延びたものも逃げてしまい、探しにやってきた兵士たちに見つけられるまで、メアリーは一人屋敷の中で忘れ去られていたほどである。

その後、メアリーがイギリスに到着し、彼女を引き取りにやってきた家政婦頭のミセス・メドロックからミセルスウェイト邸について聞いた際も、病んだ環境としての屋敷の様子が語られている。ミセルスウェイト邸は、「立派で広いお屋敷なんだけど、陰気なの。(中略)築600年でムーアの端に立っている。部屋は百室ほどあるけれど、ほとんどが閉め切られて鍵がかかっている」(10)とミセス・メドロックが説明するように非常に陰気な様子を示している。主人であるミスター・アーチャーボルト・クレイヴンも、背中が曲がり、愛妻を亡くしてしまっただけからは気鬱に塞いでいるとのこと。また、屋敷に向かう途中でみたムーアは、夜中だったこともあって、ミセス・メドロックが言うように、「十分に荒れた、わびしいところ」(14)であり、メアリーにとっては、「真っ黒い大海原で、海の中の細長い陸地を進んでいる気分になった」(14)ほどで、すべてにおいて健全さを示すものが何もないように描かれている。メアリーが到着したのは冬という時期だったこともあり、外に出ても、屋敷の庭はすべてが枯れ果て、生気がほとんどない。このように、メアリーを取り巻く要素がことごとく「死」あるいは「生気がない」状態に置かれているのだ。

また、登場人物たちも病んだ状態で描かれる。主人公であるメアリー自身の容姿も、同じバーネットの作品『小公子』(*Little Lord Fauntleroy*, 1886)に登場するセドリックや、『小公女』(*A Little Princess*, 1905)のセーラとは似ても似つかぬ病んだ様子を示す。冒頭から、メアリーは「こんなに感じの悪い少女はみたことがない」(3)し、また「小さい顔も小さい身体も痩せていて、髪は細くて色も薄く、顔は不機嫌そうだった。髪の毛も顔も黄色いのは、インド生まれでいつも何かしら病気にかかっていたせいだった」(3)と語られるほどである。

さらに、メアリーは容姿だけではなく、性格も評価されることがない。イギリスにやって来る前に滞在していたクロフォード家でも、マザーグースの一篇から「つむじ曲がりの

メアリーさま」(7)<sup>1</sup>というあだ名をつけられてしまうほどで、肉体も精神も健全ではない様子を示していた。彼女の母親は娘を持つことに興味がなく、もっぱら社交に夢中で子育てはインド人の乳母（アーヤ）に任せきりであった。そのため、メアリーは「6歳になるまでには、とんだわがまま娘に育っていた」(3)ので、誰からも愛されることがなかったのだ。

ただし、メアリー自身、本当に自分が何者であるかについては、以下のように自覚できていない。

「私は誰の子どもでもないように思えた。彼女には召使いも食べ物も衣服もあったけれども、誰も彼女のことを気にもとめなかった。それは自分が感じの悪い子だからだとはわからなかった。(中略)彼女は、他人の方が感じが悪いとしばしば思っていたが、自分自身もそうであるとは気がついていなかったのだ」(9)

ミセルスウェイト邸に到着してしばらくの間も、メアリーは陰気な様子を示し、朝食を食わず、わがままな子どもの振る舞いをする。だが、園丁のベン・ウェザースタッフと出会った際に、自分がベンと似ており、自身が孤独で偏屈だということをやっと自覚するのだ。

同様に、いとこのコリンについても、初登場時から病弱な様子が描かれる。コリンの病弱は、女性的な要素を持っている。シャーリー・フォスターとジュディ・シモンズは、コリンの顔の青白さや繊細な顔立ち、食事の拒否といった態度が、ヴィクトリア朝文学でみられた拒食症の女性の姿に類似しており、またヒステリーという手段に訴えて、コリンが19世紀末の精神医学が女性心理に典型的な行動様式を示していた例だと述べている(346)。さらに、コリンは性格もメアリー同様わがまま、ある程度回復した状態のメアリーが、彼をとがめてしまうほどである。ここまででわかるように、メアリーもコリンも、病の本質的状态は類似しており、そこに男女差があまりみられないのは、ジェンダーが未分化な子どもを主人公とする児童文学の特徴といえるだろう。

そんな不毛な状態から始まった物語は、最初にインドという外部からやってきたメアリーが、自分自身を知り、自ら癒しの手段を得ていくことから、徐々に回復の兆しを見せ始める。それは子どもを保護すべき大人によってではなく、自然の動植物との出会いによって得られるのだ。メアリーは、ベンと出会った際に一羽のコマドリとも出会うが、それが彼女にとって初めての友となる。そのコマドリの導きによって、謎の庭園が見つかることで、メアリーは、自らの安息地を見いだす。

そして、以前は陰鬱な場所だと思っていたムーアや、マーサの弟のディコンの話の聞いて



て、生き物を飼うということが、メアリーにとって「健全な情操の幕開け」(20)になった。メアリーにとっては、自分という人間を自覚すること、そして、ムーアのもたらす新鮮な空気や、マーサとディコンの母親ミセス・サワビーが彼女に与えた縄跳びという運動、そして花園での園芸が彼女の心身を健康にしていく。それによって、メアリーは自然に癒やされて自らのアイデンティティを見いだすのに成功し、これまで彼女の中になかった優しさや、美しさ、そして女の子らしさが出てくるようになるのだ。

コリンの場合は、メアリーが実質的に看護人としての役目を果たすことで癒やされる。特に、コリンが痲癩を起こした時、メアリーがコリンの痲癩の発作に腹を立てて、「あなたの病気は半分ヒステリーと痲癩よーただのヒステリーヒステリーヒステリー！」(103)と叫び、彼の不安と病の原因を言い当てる。そして、彼がもっとも恐れていた背中のこぶがまったくみられないことを指摘し、彼の不安を完全に取り除いてしまうのだ。メアリーがコリンの症状を「ヒステリー」としたのは、ゆえなきことではない。メアリーは、あくまでもコリンの付き添い看護師が医師から聞いた内容を援用しているにすぎない。だがコリンは、医師や看護師に言われるよりも、同じ子どもであるメアリーに指摘されることで、初めて納得できたのだ。

ちなみに、コリンのヒステリーについて、モーリーン・M・マーティンは、「生きることも死ぬことも恐れ、痲癩と永続的な絶望という悪夢に隠れているコリンは、イギリスの支配階級の男性にとって最悪のシナリオを表している」(143)と述べている。言い換えるならば、コリンは、病弱とヒステリーの症状ゆえに、本来持つべき男性性を獲得できていない状態を示している。しかし、それは、彼が子どもゆえにジェンダーの枠組みにまだ入っていないからだ、とも考えられる。

痲癩が収まった後のコリンは、メアリーによる癒しだけではなく、ディコンとの交流、そして花園の持つ自然の力によって、メアリーと同様、次第に回復し始める。花園に入ったその日のうちに、車椅子から立ち上がって数歩歩くことができたほどだ。彼は精神面でも大きく成長し、自身がずっと生きられると自覚した後は、単なるわがままな様子を示すのではなく、将来健康な大人になって科学を探究したいという夢を語り、自身が調べた事柄をメアリーやディコンに講演したがるようになる。

コリンの最後の癒しは、父親との和解によってもたらされる。旅先から帰国し、病弱だと思っていた息子が元気に秘密の箱庭で走り回っているさまを目撃したミスター・クレイヴンは、息子と連れ立って屋敷に戻る時には、コリンが「スポーツ選手で講演家、そして科学者は、面白くて愛すべき健康な少年」(172)になっていることに気づくのだ。こうした癒しの過程を経て、コリンも次世代のミセルスウェイト邸の当主としてのアイデンティティを獲得していくのである。

### 3. 子どもと大人のナーシング・ナラティブの相違点

このように、『秘密の花園』においては、病と癒しのモチーフが物語全体を覆っている。大枠はヴィクトリア朝文学にみられる癒しの言説を踏襲しているものの、子どもと大人のナーシング・ナラティブには、4つの相違点がみられる。

まず、大人と子どものナラティブの中で最大の違いは、子どもたちの中に性的役割分担がみられないという点にある。互いに10歳であるメアリーとコリンは、男女の相違よりも、その生き方や性格における類似性の方が強調されている。また、12歳という思春期にさしかかりつつある少年ディコンも、あくまでも「自然児」であり、まだ大人の男性性を獲得する前の状態に留め置かれている。

そのディコンは、動物と親しく言葉を交わし、動物や植物の世話をよくするが、彼に特徴的なのは、その「癒しの力」にある。メアリーが指摘しているように、ディコンは「いつも生き物の話をしている。死んだものや病気のもの話は絶対にしない」(86)のである。彼は、巣から落ちて死にかけてたカラスや、母狐をなくした子狐、同じく母親を亡くした子羊をムーア散策中に見つけて助け出し、すべてを世話して回復させる。ディコンは、子羊にミルクをやっている場面では、明らかに彼はその子羊に対する看護人として機能していることがわかる。

さらにディコンは、心を病んでいたメアリーとコリンをも、自分自身の健全さでもって癒し、空腹に悩む二人に、新鮮なミルクや焼きたてパンを与え、また秘密の庭園内にかまどを作って、そこでじゃがいもを焼くといった形で食事を提供するのだ。ディコンにとって、メアリーとコリンは、親が不在の子どもという点で、彼がこれまで助けてきた動物たちと同じ扱いなのだ。ディコンのこうした「癒し」は、メアリーとコリンにとって、心と体の両面で回復するために必要不可欠な要素となっている。

こうしたディコンの癒しは、どちらかというとも母性的なものも感じさせ、ディケンズの『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)に登場するピップの義兄で、「癒しの天使」とも言われるジョー・ガージャリーと類似している。ジョーもまた、屈強な体つきの鍛冶屋ながらも、非常に心優しい人物で、姉から虐待されていたピップを守る役割を果たしている。最終的に借金と病に苦しむピップを手厚い看護で癒すのはジョーなのである。<sup>2</sup>

また、ディコンの癒しは、異教的だという見方も存在する。フォスターとシモンズは、彼はパンの神のような存在であり、最初に登場したときにも「粗末な木の笛」を吹いており、森の動物たちの中心にいたことから、ディコンの存在する世界においては男女差も階級差もなく、ただ自然だけがあると指摘する。(352-353)

ただし、メアリーとコリンが病んだ状態から回復していく過程で、最初の頃にみられなかった性的役割分担が、徐々にみられるようになる。コリンは、主人不在のミセルスウェ

イト邸での「次代の主人」の座を獲得していく。またディコンがコリンに教えるのは、体力増強という名の筋力増強トレーニングであり、それによってコリンは男性的な肉体を獲得し、最終的には庭園内のかけっこでメアリーもディコンも抜き去って一番でゴールにたどり着けるほど元気になるのだ。

第2の相違点は、癒しの過程で主に使われる「場所」である。ヴィクトリア朝文学における大人のナーシング・ナラティブでは、看護の中心的場所はいうまでもなく家庭内の「病室」という空間に留まっている。だが、『秘密の花園』においては、病室ではなく屋外の「花園」がその役割を担う。これは、『ハイジ』でも同じ構造を示しており、ハイジやクララが病むのが、フランクフルトの屋敷内だとすれば、彼女たちの心身が回復を迎えたのは、アルプスの清浄な空気の中という屋外であった。これは、子どもは屋内の子ども部屋で大人しく過ごすことが良しとされた考えが、子どもは屋外で走り回って新鮮な空気を吸うことで自然の治癒力を得て、本来の子どもらしさを得ることができるという価値観に変容したことを示唆している。大人の物語において、屋外で看護行為は考えにくいことから、これは子どもの物語独自のものだと考えられる。

第3に、看護の主体が大人ではなく、自然や子ども自身にあるという点が大きく異なる。先述したように、ムーアの自然と花園という空間が子どもたちの癒しに貢献しているが、そこに大人の介在する余地は、庭師のベン・ウェザースタッフと子どもたちの母親代わりであるミセス・サワビーを除いてほとんどない。また、『秘密の花園』では、大人が主体となって看病しているときのコリンはむしろ病んでいくばかりで、彼らの癒しはまるで効き目がない。ところが、その役目をメアリーやディコンが引き受けるようになってから、驚くほど急速にコリンの心身が回復していくのだ。それは、子ども同士が大人の支配から逃れて自由になったからという点と、やはり、「花園」がもたらす動植物からの癒しの効果が大きかったからだと考えられる。これは1950年代からアメリカなどで始まった園芸療法（Horticultural Therapy）の先駆けのようなものである。<sup>3</sup>

大人に対する反発心が露骨に出ているのが『秘密の花園』の特徴であるが、特に権威をもった大人、つまり医師や看護師といった医療専門職による介入を極力否定していることも特徴的である。まず、医師については、コリンのおじにあたるジョン・クレイヴン医師が常日頃コリンの診察を行っている。だが、クレイヴン医師には、背中をまっすぐにする鉄の板をコリンに身につけさせるなどといった旧来型の医療知識しかなく、コリンを適切な治療に導くことができない。また彼は、コリンを海辺に転地療養させたりしたこともあるが、それも効果がなかった。唯一頼れるのは、ロンドンから来た高名な医師で、彼だけが適切な診察を下し、子どもの自己回復力に委ねるべきだと主張したが、彼がコリンの主治医となることはない。



結局、クレイヴン医師が看護師以外で信用するのは、ディコンやミセス・サワビーであり、彼らにコリンの看病を手伝ってもらうことは否定しない。曰く、「ミセス・サワビーは、私が知る一番のナースです（中略）往診先のコテージに彼女がいると、患者を救える可能性が高いとわかる」（113）し、ディコンは、「新生児ですら任せていい子」（122）なのだ。彼らは子どもたちの味方であり、ゆえに対立することはなく、子どもたちにとって適切な癒し手となりうる。

同様に、看護師がまるであてにならないように書かれている点には、注意を払う必要がある。コリン自ら、メアリーの方が何でも知っているということで、必然的にメアリーがコリンの実質的な看護人となっている。というのも、コリンの専属看護師は、とかく仕事をしながら、夜通し看病することも良しとしないのだ。その好例として、メアリーとコリンが口喧嘩をする場面がある。その際、「訓練を受けていた看護師」は、二人の喧嘩を立ち聞きしており、二人を諷めるどころか「大笑いしていた」（100）のだ。さらに、メアリーは彼女のことを次のように評する。

「この大柄な若い美女は、まったく正看護師になるべきではなかった。というのも、彼女は病人の世話をするのに耐えられないし、年がら年中口実を作っては、マーサや他の誰か交代してくれる人にコリンの世話を任せるからだ。メアリーは、彼女のことが決して好きになれなかった（略）」（100）

ただし、この看護師がまったく役に立たない人物だというわけでもない。というのも、彼女はコリンの病弱の理由が「半分ヒステリーと癩癩にある」（100）と指摘し、それをのちにメアリーが自分で言い換えることで、コリンを納得させることに成功しているからである。そして、コリンがひどい癩癩を起こした時に、一番にメアリーのところにやってきて助力を乞うのも、この看護師なのだ。本来なら、専門職であるはずの看護師が、ほんの子どもに過ぎないメアリーに助けを求めること自体がおかしな話である。しかし、児童文学という、子どもを主役とする物語において、メアリーが看護人役を引き受けるのは非常に効果的なのである。

さらに、コリンが回復の兆しを見せ始めたとき、子どもたちはその回復具合を大人には「秘密」にしておく。そこには、父親に一番に見せたいからというコリンの気持ちもあるが、それよりもむしろ、周囲の大人たちに対する反発心も含まれているからである。ジリアン・アダムスは、「秘密」を持つことで、秘密の存在によって両親の間に子どもが完全に支配できる境界線が引かれ、その境界線の存在が子どもに自尊心を与え、自立へと向かわせると述べている（303）。秘密をいい意味でも悪い意味でも保持することが、子どもた

ちによる癒しの物語を大人の物語とは違う独自のものを作り上げることになる。というのも、大人たちは、病気からの回復状態をわざわざ隠したりなどしないからだ。

最後に、『秘密の花園』という作品ならではの大きな相違点がある。それは、物語で頻繁に登場する「魔法」を、子どもたちが癒しの源と考えていることである。大人のナーシング・ナラティブにおいて、「魔法」といった言葉で癒しを求めることはまず考えられず、看護人がもたらす献身や愛情、そして当時の医学や公衆衛生などが癒しの成否を決めることになる。

それに対して、『秘密の花園』においては、あらゆる形で「魔法」という言葉で癒しが表されている。たとえば、コリンの痲瘋の発作をメアリーが収めたのも、「魔法」のおかげであるとされる。それを指摘したのはマーサで、彼女は、メアリーこそが屋敷の病んだ雰囲気に魔法をかけてコリンを癒し、すべてを変えたと考えたのだ。その意味では、外部からやってきたメアリーの影響力を「魔法」と呼ぶことができるだろう。

ところが、「魔法」が意味する範疇はかなり広範囲にわたっている。「魔法」と題された第23章で、コリンは、「毎日花園に行けば、そこに魔法がある一良い魔法が。(中略)もしそれが本当の魔法じゃなくても、(中略)『なにか』がそこにある。『なにか』がね」(136)と言い、メアリーも同意している。この曖昧な「なにか」を、子どもたちは信じ、それによって夏の数か月間は、花園のあらゆるものが成長し、コリンも健康になっていく。

さらに、コリンが「太陽が輝く。それは魔法だ。花が育ち一根が伸びる。それが魔法だ。生きてることが魔法だ一丈夫になることが魔法だ。魔法は僕の中にある。(後略)」(141)というように、子どもたちは自然界に命を吹き込む力をも「魔法」と呼んでいる。自然の神秘だけではなく、自分たちの生命力も魔法と呼ぶことで、その強力さを実感する。そしてコリンは、魔法から科学、宗教、超自然的現象、運動の方にも関心を広げていく。特にコリンは、実験と称して自分が様々な形で考えついたことをメアリーやディコンに講演することを好み、さらに、自分の足の具合を良くするためにディコンが知り合いのボクシングチャンピオンから聞いてきたトレーニング法を実践するのだ。だから、単に「魔法」という言葉でまとめられる超自然現象を利用したというわけではない。

それでも、コリンは「魔法」のおかげで、自身は癒やされ、さらには父親をも癒したと信じており、その「魔法」の仕組みを解き明かすことが彼の今後の目標となっている。彼が子どもであるため、他の適切な言葉を持たないことから「魔法」という言葉を多用しているとも言えるが、その言葉で自然の神秘を捉えようとする姿勢こそがセンス・オブ・ワンダーを導く児童文学としての重要な役割であると言えるだろう。

#### 4. 子どものナーシング・ナラティブの帰結

子どものナーシング・ナラティブは大人のそれとは異なることが明らかになったが、子どものナーシング・ナラティブは、児童文学の枠組みの中で、最終的に大人のナラティブと共通化していく。つまり、子どものナーシング・ナラティブは、癒しの対象（あるいは主体）たる子どもたちが、既存の父権社会に上手く組み込まれるよう、規範的な性的役割分業を担うようになるところで「健全」とみされ、終焉を迎えるのだ。

たとえばメアリーは、最初は女性性のかげからも見えないほど容姿に恵まれず、性格もつむじ曲がりだとされていたが、物語の終盤では、彼女自身がコリンの看護人役を担い、容姿も美しかった母親に似てきたと言われるまでになり、徐々に女性性を獲得していく様子がうかがわれる。それにともなって、メアリーは物語の前景から遠ざかり、代わりに男の子のコリンが中心となって物語が展開することとなる。そして、コリンが心身共に回復する過程で、彼は自分が一族の次世代の主人になることを自覚し、運動や講演や科学に興味を持つようになる。身体的にも、帰宅した父親のクレイヴン氏が驚くほど元気に走り回れるようになり、劇的な再会を果たすのだ。

しかし、秘密の花園から父子で仲良くミセルスウェイト邸へ戻る場面で、メアリーは一切描かれていない。屋敷の次代を担う「若き主人」と並び立って歩くことは、メアリーには許されていなかったのだ。結局、メアリーの空間は「秘密の花園」という、かつてのクレイヴン夫人が所有していた女性の世界の中に留め置かれてしまうのである。そういう意味で、子どものナーシング・ナラティブは、大人のナーシング・ナラティブと同化する結末を迎えると言えよう。

同様に、この物語は階級の転覆も一切認めていないことがわかる。同じ場面で、メアリーと同様に、ディコンの様子も描かれていない。あれほど子どもたちにとっての「癒しの天使」だったはずのディコンの活躍は、父子の和解の前に何の役にも立たないのだ。そしてその事実をメアリーが改めて指摘することもない。さらに、これまで子どもたちを支えてくれた大人たちの描写も、あくまでも屋敷の人間としての描写に留め置かれることでそれ以上前景化することはなく、既存の屋敷の人間関係に収束していく。そこには、秩序正しい「父権主義的な」世界が健全に運営されていくことが示唆されており、子どものナーシング・ナラティブの成立条件が消えてしまうのだ。

その意味で、子どもが作り上げるナーシング・ナラティブとは、あくまでも「病んだ」環境が「秘密裏」に作り上げる一時的な避難所のようなものである。だからこそ、メアリーが見つけた「秘密の花園」がまさに「癒し」の中心地として機能するのだ。そこでは、男女や階級といった区別はなく、「子ども」が大人の目から逃れて自由に動き回れる空間である限りにおいて存在しうる世界なのである。ゆえに、コリンが完全に回復した

後、花園はもはや秘密の場所ではなくなり、「癒しの場」としての役目を終えることになる。

要するに、児童文学もまた、当時の保守的なイデオロギーの範疇に留まることを要請され、とりわけ本を子どもに与える大人にとって安心できる結末を用意する必要があったことを意味しているのではなかろうか。

## おわりに

以上のように、子どものナーシング・ナラティブとして『秘密の花園』を読み解くなら、それは大枠として、ディケンズの作品に代表されるようなヴィクトリアン・ナーシング・ナラティブの型に当てはめることができる。病室の中では階級やジェンダーを超えた関係が成立しうが、それは、あくまでも秩序回復のための緊急避難の装置として用いられる。秘密の花園も、限定的な癒しの空間という意味においては病室と同様の役割を担っている。しかし、登場人物が子どもであるがゆえに、ジェンダーや階級は前景化されにくく、それよりも自然や動植物、遊びや運動といった要素が重視され、それが子どもの肉体と精神の癒しに貢献するという点は大人のナラティブとは大きく異なる。また、癒しを通じて親との絆が再構築ないし再確認される点も重要な相違点である。メアリーは、両親に見放された子どもであったが、秘密の花園の再生を通して、容姿がだんだん母親に似てくるようになってきたと指摘される。それによって、メアリーはなかったはずの親との絆を取り戻すこととなる。コリンもまた、自身の健康を取り戻すことにより、父親との関係を再構築することができたのである。

この作品は20世紀初頭に出版されたが、それでもなお、ヴィクトリア朝的イデオロギーからは逃れ得なかった。むしろ児童文学だからこそ、男女平等や階級の否定といった革新的な展開は、本を買い与える親たちに受け入れられないという危惧があっただろうことは想像に難くない。それでも、バーネット自身が描いてきた典型的な「良い子」の主人公たち、セドリックやセーラとは違って、不器量でわがままなメアリーやコリンといった子どもたちを登場させ、彼らが自ら自然の力を借りて回復し再生を果たしたことで、それまでの受動的だった子ども像は変容し、『秘密の花園』という作品が魅力あるものに仕上がったのだと言うことができるだろう。

## 註

1. 元々の小説の題名は「つむじ曲がりのメアリー」だったとされる。ちなみに、このマザーグースの歌は、作品内では「つむじ曲がりのメアリーさま／お庭の育ち具合はど

うでしょう？／銀の鈴にトリガイの殻／それにマリーゴールドが一行に」(7)とあるが、この歌詞を読んですぐにわかるように、メアリーが歌に登場する植物を花園に植えていき、それが物語の伏線ともなっている。

2. ジョーが「癒しの天使」(Ministering Angel)であると言えるのは、ディケンズ自身が作品執筆用のメモに残しているからである。「癒しの天使」という文言の後にジョーの名が記され、さらに彼の名前の下に三重線が引かれている。このことから、ディケンズがジョーの物語中の役割をかなり明確に意図していたことがわかる。(485)
3. 園芸療法と似たようなものが、1879年にメアリー・ベーカー・エディによって創始された「クリスチャン・サイエンス」と呼ばれる一種の新興宗教である。その考え方は、『秘密の花園』の癒しの手法と似ており、現に、ロイス・キースは『ハイジ』との比較の中で、バーネットの「魔法」という概念がフロイトとエディの考えを両方含んでいると指摘している(135)。だが、バーネットは、自身のエッセイで、クリスチャン・サイエンスとの関連を否定している。(249)

#### Works Cited

- Adams, Gillian. "Secrets and Healing Magic in 'The Secret Garden.'" *The Secret Garden*, edited by Gretchen Holbrook Gerzina, W. W. Norton, 2006, pp. 302-14.
- Burnett, Frances Hodgson. "Mrs. Burnett Not a Christian Scientist." *The Secret Garden*, edited by Gretchen Holbrook Gerzina, W. W. Norton, 2006, pp. 249-50.
- . *The One I Knew the Best of All*. Jazzybee Verlag, 2017.
- . *The Secret Garden*. Edited by Gretchen Holbrook Gerzina, W. W. Norton, 2006.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Edited by Margaret Cardwell, Oxford UP, 1998.
- Forster, Shirley and Judy Simons. *What Katy Read: Feminist Re-Readings of 'Classic' Stories for Girls*. Macmillan, 1995.
- Keith, Lois. *Take Up Thy Bed and Walk: Death, Disability and Cure in Classic Fiction for Girls*. The Woman's Press, 2001.
- Martin, Maureen M. "Healing National Manhood in *The Secret Garden*." *Frances Hodgson Burnett's The Secret Garden: A Children's Classic at 100*, edited by Jackie C. Horne and Joe Sutliff Sanders, Children's Literature Association and The Scarecrow Press, 2011, pp. 137-53.
- Thwaite, Anne. *Waiting for the Party: The Life of Frances Hodgson Burnett*. Faber and Faber, 1974.